和田定節編輯

開明小說

春雨文庫

第七號

上

A416
13

梅亭金鵞閲
和田定節編輯

開明小説

春雨文庫

東京書肆 文永堂

48-7531

春雨文庫七編叙

春雨の降りしぐる夜の枕頭を、ぬらしてゆく音、
聞くにつけ、思ひ出でぬ。庵の軒の端の、
ものうさ、
この夜思ひ出でぬ。庵の軒の端の、ものうさ、
里長宋ちるまで軒の雫も晴れぬる頃、何の
為にか、空の晴れ、曇る風情、
如何ともせず、和田の大人が化
義禮智の信を重ね、意況こめて著されし

有る洋妻西文学の田沼氏島ひ書を流ふ院
に七編と形りふう異なん大人が学所の滑
稽物の発兒を愛顧の看客今人生と
待る元のうふ洋式寿梓きる文永堂の主人
移張雇ず墨ずらで晴れ観がん地よ
さる一日乃東堂発兒此物実物が并
園み書作く自ふ序文をねせきとに
りれ序乃又直み筆洋楼法漢学院

乃雇ずく彩ぐ。大傳が晴てす云法
が学洋生作綴り云生似一て千代ッ
と賜り興のよの方ん
年時明治十四年霜月の
中田東京隅田園の南恵
み学業の服

二世
東京了古誌

書籍
書籍
書籍

清兵工ゲ
許ヘ寅吉
小常ゲ多
ヒ送る

京師梅の宮の辺り
近藤勇が住居

冷泉古風大人が
詠歌浅巻中俵
屋清兵工が身ふ
想ひ合しく

東京　和田定節著

○第廿五回

俗鴉啼き悪しくと言て是が聲や氣に掛け又その見耳きする物に觸れ否な辻占ざるべく心や痛まる者あり取り分け浮たる社會に於ては些細なるなれども善悪や唱へ或ひは心や悩まし或ひは思ひや悦ばしる我常と做せり然るに此日小常は芝居の内に在りても

何となく氣よ掛る事のこ多かりし故見物一たい詰込し桟敷の中といひ彼是逆上よ堪ざれた江戸屋の二階へさけ風よ吹れて居ると寅吉ゞ案内よて入り来りたる二人りの武士よ居り直して不審顔へオヤ寅さんアノ且那方ゞ吾侭よ函用ゞ有と社仰のでまろへ左様さ此且那さぬい中國をぢの方くで兼て横田の親方さんと御昌員よなさり一方ならぬ御懇意よ付何ゝ内証で横田の親方よ函用ゞあれど世間と憚る事で他へ漏てい成ぬぬ名小常さんゞ芝居よ居る

と僥倖夫となくく小常さんゞ是非逢くいと言ふ文言よしと清兵衛さんと呼で貰ひたいと社仰訳と演る側わゝ一人の武士膝さり出して顔と和らげ〳〵イヤ何小常さんとゆふ始めてお目よ掛る拙者い長州の藩士よて萩原源内と申ま者なるゞ清兵工どのとい無二の交りある中然るよ此程おひ〳〵世間ゞ騒くしくなるよ附き表向よてい関東の者らく對し遠慮の沢

なりて面會致しがさけれど是非とも遇弥が恢いぬるある故彼是心配いたし居しよ今當茶屋の表よて寅吉よ往合ひその話しを為ると夫なふび横田氏の見賀よ思ふ小常と言ふ婦人ゞ今日この劇場よ參りそるよ因り此者の手紙よして招きたぬいぶ何様まちがいて其ゆゞ人手よ這入るるありても食さぬのお名前も出ぎ横田氏へ崇りの參る沢も無き故コリヤ左様ちさゞ宜しからうとの注意実よ此らくのゐい良策と存じ我く両人してお前の樂しうの邪魔といふ思ふさゞ横田氏へ一筆ちゝめ出して貰ひ度參ッさ訳我くと横田氏との中い寅吉ゞ宜くぞんじて居る近頃卒示の次第なゞ此方ども斗りでなく横田氏の為なればお前の用向よして是非とも来て呉ろといふるを一筆書て貰ひたいとの頼ちよ小常い差俯き暫時かんがへ居さうしゞ寅吉よ對ひ〳〵アノヲ寅さん直るよお氣の毒さゞゞ吾儕アお酒よ酔ぎ

て手ぶ震へ筆の持ないのさなふ血の道ら発つて
塩梅ぶ悪いのぶかふお飯よう好な芝居の中をさく
出て一人こよ居る位な訳迚も多みぞい書ないか
らお断り申して下さいオヽ切ないト横を向び寅吉
い手を搦挪こくと遣りなぶ〳〵然も此座いませう
ぶ小常さん横田のお見世よ取つてい大切な旦那方
のお頼を筋清兵工さんのお為よ成ての仰なれば
只さ一筆で宜い無理でも有らぶ我慢をして書て上

て下さいナ去来こく一寸と言ひなぶら手を打き茶
屋の女を呼で硯箱を取りよませ小常の前へ差出せば
小常い是を見も返らぜ〳〵塩梅ぶ悪くつて書ないと
言ふよ寅さん無理ぢやア有ませんうト少し勃と為
れば〳〵寅開りやアむりさ無理ぶけれども少しのるを
厭ツて清兵工さんのお身の上よ大事でも有てい済
ねへと思ひやをかふサ〳〵其様なふお前さんぶ往て
訳を話してお連申しなふ宜ぢやア有ませんう此時

武士がまこ
傍かゝへ其
ゆサ既み
寅吉よ往て
呉ろと申し
たゝ

お侍ひ方と親しくなさるのい姫節
でいお家の者へ内証の仕容子ゆゑ打附

よいお話しが出来ぜ然りめて蔭へお呼び申して話
していお家のお方の仕疑心も掛れば何分私しでい
困るお手紙使ひなふ致しませうとの事今日横田氏
よ面會致さねば横田氏の身よ取り甚しき不都合が出
来ようと思ふゝ夫で氣を揉のがお前も寅吉の
話しでい横田氏の世話よ成て居る身で見れば朋友
の此方が是ゆどよ氣を揉で居るのよ對しても塩梅
も悪ろふうが我慢をして一筆ぐらゐ書ないるい無ら

うふと言れて小常いさゝ俯き心の中よ思ふやう往
さるゝや村田さゝたゝゝ格別終よ見さるゝの無人達ゝ
断りい断ツさゞ何も彼もお任せよ成て居る寅吉の
連て来さ武士で寅吉ゞ使ひよ往のゞかゝ間違ひの
有るゝも無らう丈と無理よ断ツて若ゝ清兵工さん
の仏不都合よでも成てい悪いト思へゞ少ゝ躊躇色
目と寅吉い早くも見て取りてへモシ氣色の悪いよ面倒
でも有うゞ只一筆ちよいと来て下さいと言ふとさ

へ有がよい実い今日い是非ゝへお出の積りで有
たゞ何程なんでもお福老さゝの前へお出なきり悪
いわゝ仏遠慮成さ訳所へ私ゞお為と直下よお渡
し申しゆア清兵工さんい丈とお屋敷のお迎ひ手紙
ろ何ろよしてお出かけなさるゝゝ私の考へぢゆゝ
清兵工の為よゆア渡りよ船ろと思いれまをゞて饒
舌たてゝふれ小常い何とたゝゝ氣の進まざるゝゝある故
断りて書ざりゝろど頻りよ横田氏の為よ成ぬの清

兵工さんと不都合が有うのと言れ待て清兵工が平
日目を掛て居る寅吉の言ふるゆゑ漸ふ顔を上げ〳〵
夫ぢゆゑ皆さんのお特を寅さんのお言のとゆゑ一
筆で宜きゆゑ書ませうヨと渋く硯引よせて人を取
う食ふ寅吉が工さと巣といい白紙へ走らせ文字の自
づから渋渋も理り後ぞ知る涙の種のまいふせれ言
葉ぶりと筆止めて讀みかへし見ツ舌打なし自烈
体三條さんと成さとい氣がくりな辻占と思へど其

侭くるく巻き封を做しつて三人の前へ差出し〳〵唯
墨が附て居るといふ手りぶかふ寅吉さんが口上で
宜い様と言てお連れまうして来て下さいオヽ切ない
ト額を押へ哼息吐つうつ向けば武士い顔見合せ
〳〵氣分の悪いと御迷惑で有さらうが是で清兵工殿
の為ともなり我らが都合よも宜いといつのりの夫な
ら柊屋さんは苦労でも此為を持横田氏まで一下走り
往て貰ひさい開してお前方も是非来るやうふと

二三年すへなふ胸を抑いて委細こゝゝと申す所
なれど頭悩ま確りへンわなふぎお連申して参りやを
夫ぢゆア小常さんのお為い私しゞお預り申しまし
てト上書を見なゞら懐中ま入きへ左様なふ一ト走り
往て来ませう小常さんい一息ついゝゝ桟敷へ往き
是がふゞ肝心の幕ゞと言ふふ又見物ま頭痛の種
を蒔てお出なさいト二人の武士ま會釈なし二階を
下りて表へ出しゞ小常の為を懐中かゝ出しちよいト

見てまゝと懐中へおさめなゞゝへふ常めも武士の容
子を察しさゝ中く諾と言なんゞゞ何様ゆゝ彼様ゆふ
安心しゝどれ向ふ臑の三まいで遣附ろさと猶う言
して足を早め俵屋さして急ぎたり
茲ふきゝ横田清兵工い桂山形村田らの人ゝと申し
合せ一時幕威を避んゞゝめ毛利侯の領地なれば長
州の地ま為むゝんとし明日いよゝ発足と定め
たる故朝より家ま居て母の氣をして安かふしめ妹

お樂惣領徳太郎二男庄吉よも別して優しく不便を
加へ妻のお岩より殊さら心を置き夫となく物よ比
へて家子を頼ミ見世の番頭若い者よも夫れと指
揮を做し當ぶん留守よしても差支え無やうよ心配
し又我誕生の取越しなりと号し此日ハ朝ゟ仕出
屋よ言ひつけ多く魚鳥を取よせて料理させつゝ母
狆め見世の丁稚臺所の下婢よきゞ十分あるへ心よ
送別の祝ひなし其身ハ猶居間よこもり攘夷黨より
送りある書物長藩士薩藩士の書状をゞハ尽く纏め
て知何尋称らるゝも知れざる処へ隠し証拠の種を断
て萬一の時の用心とあし心掛うのエ大畧濟せみれ
ば少しく落着き火鉢よ肘を持せつゝ煙管をとりて
煙草ハつぎてゝも呑さへ忘れ右左の思ひふ忙然たり
し時寅吉ハ麩屋町へ走りつゝ俵屋の裏口より揚り
例の通り座しきへ通れば清兵エハ見てふしん顔へ
寅公ゟ今日ハ兼て頼んざ一件ト言ひなゞら四辺を

見まい〳〵小聲になり〳〵御延引をぜるでも成さのう
今時分来さへ何様〳〵訳さ〳〵イエ何ト言ひか仆是も
聲を竊め〳〵隨分上等の場〳〵よを取りか誂らく通う
よ致〳〵一同が大よろこひで見て居りまを所で小常
さんが急よ旦那よか目よかうさいるが出来さう
ら此魚を持て往て御らんよ入れ直か連申しを來て
呉ろとのか頼こ故大急ぎて参りまさ委細い是よ
書てありませうト出を一通の服がきい急用とある

よ清兵エは小首を傾げながら〳〵ハテ何が始まりさのう
大概なるあふか前よ頼んで有のがう左様言てよ
こさぞと宜よト封か〳〵切て開き見れば仔細い何と
も書てなくたゞ當方へ少〳〵も早くお歩行を願ふと
有ばかりなる故寅吉よも訳を知らさぞ態く彼様〳〵
て寅吉を使ひよ被来い何ろさ〳〵かうり餘儀ない訳
の出来〳〵なるん幸ひ家の内のすい少〳〵片つきさ
れば一走り往て見ん然が寅吉の知らぬト言ふい不審

さ此いをゞ〜い中へ洒落ら何らよ呼附られてい詰ら
ねと思ひ〜ゆゑ〜清一ゑ多い何の訳とも書て移くゞ無
多隙をつぶさせられるのぢゆア困るお前の知ら移く
るいあるわく一ッ穴の貉ちゆア移へら何の用ぞと聞
れて桧屋いハッと言〜まゝ差支へ〜ゞ天窓を掻ながぶ
ら〜エ、何をれいアノ今日い旦那の御用多成存〜て
居るかゝ大概なゝエ、お留まうそうと存ずるゞエ、
是非急よお目よ懇ッてお話しをきをけれゞ成まい

をゞ出来るのゞらゝお呼び申〜て来て呉ろとの御懇
願実よ其訳い何ざら知りません清一〜左様ら夫ぢやア
仕方ゞぬく鳥渡往とちませう〜夫い有ゞゝい夫で
いアノ小常さんゞ何様で有うゝトお模様を待て居ませ
う且那のお出よ成とを早く耳せてあげさいゝゞ一足
お先へ出かけまを且那いお支度〜ゞい何卒お出を願
ひまを左様なゝゞト言ひ捨ッあゝるゝとして帰り往
たり清兵エい後見おゝゝ〜彼の男い如何〜ゝのゞ

平日と変つて周章かと訳を知らぬと云ふ嘘で何れ仔細のある事ぞらう最早小常と云ふ遇まいと思つたのだが一走り往て来やうと嗚呼何よりも氣忙しいなぁと云ふ困るぞと言ひ頻て身拵らへをぞ做しける

○第廿六回

西山と傾ぶく日脚と心せうれ横田清兵工と歩行と早め四條の芝居まち江戸屋の見世さへ来かゝる折しも右左よりつと現れ取まく人数と兼て手配りなし待設けるものもや有んと御用上意と聲かけて十手振あげ打かゝれが清兵工早く身をかわし先なる者の腕首を取てかゝるを投除なぐり突立あがつて四辺を白眼へ何故あつて此狼藉捕縛をあゝべき罪科を犯せし覚えかつてなし手荒の振舞あるるとかの役人ろい知らねども細腕なぐり用捨い致さぬ仔細を申し聞けられよと大音聲を呼いれども耳へ入れぬ冥東武士へものを言せぞ召捕れと言れて

清兵の工人
幕吏
嫌疑を受く

〳〵アッと目明ら一度よ飛つき組かるゝを右へ投のゝ左
よ拂ひ拳よてなぎ足よて蹴かへし組子の十手うゞ
ひとり東奔西馳と雄うろる勢ひ更よ撓ま祢ゞ元よ
り武もなく勇もなき目明どものらるゝのゝ横田ゞ
手練よ辟易なし持あまし居る其折かゝ奥より立出
る両個の役人〳〵ヤレ待清兵工手むろひもる守護職の
差圖ゝうけ召捕りて問尋ぬべき仔細のあるなり申
し聞きい白洲よ於て做ものべきゞ脱ざて致きい身の

為なるゝを尋常よ縄ゝ請よトいの聲冥き清兵工忽ち
姿形ゝ正し色ゝ和らげ両士よむろひ〳〵私しるゝい麩
屋町よて書籍ゝ鬻ぐゝ渡世と致き俵屋清兵工と申
きものの守護職會津侯の命とあれゞ聊拒む所存なし
何所へなり罷出かん尋祢の筋ゝうけゝまいらん去来
縄ゝ掛られよ御同道ゝ仕らんと少しも屈せぬ大丈
夫類ひ稀なる武雄よて勤王無二の忠信なるも遂よ
此とき縛よ附き非戈の獄屋よ繋がれしい是非もな

き世の有さまなり

一説に依れば柊屋寅吉い狭客風そこのこ番隨院の長兵工野ざゝし五助などの事跡をたゝひ強きを見れば當り弱きを見れば助け貧困なる者に我が衣服を賣りても是を救ひ仮にも非道を為さざりし故清兵工いその志しを愛し常に交際を厚くなし何るをも隠さず話し我片腕と特こなる故にお岩を口説しも実い清兵工に特まれたるに

て清兵工い清水寺の月照を尊び勤王の徒の或い死し或い縛に附き日に増し勢ひを減ずるを見て我も程なく其群に落入んと必定然るときい我に代りて母を養ひ妹を助け二人の子を育てる者にお岩なり彼い賢にして貞実なる性質なれ思ふものゝ色い思案の外といへども我此ほどより小常の許へ通ひ家を外にして居る故色に毫も現いさぬど心の内に面白ゝ思ひ居らん猶後

のるの任さるゝ後試し見るに此時なりとて寅
吉を特に迷惑がるを無理なお岩を口説せ見しを
う然るなお岩に風に柳のあしらひ振なるも其中
に確呼なる貞操あらされ寅吉が心をして数回感
動せしめしに此夜清兵工に厚く告げ試よも
せよ斯る貞女に戯れたるなを言ひかけ苦しまを
るに罪深しと思ひける故実に其たにむれなるを
を明しお岩の心を安らせんと其折を窺ひられど

宜き間を得ざるに北野の天神に夜参りせるを
幸を此処に待うけ其実を明さんとせし処豈たら
らんや両士の為に不意を打れ投出されて懲され
んとに茲に於て是を告るの便宜を失ひし内今日
のるに至りしなり然れば此日清兵工を迎ひに往
しに実に清兵工を助んとの心なりと其故いか
ぞやよりして鎖港黨にあれ関東方にあれ大藩の
武士にかゝべつ市中の者にて此事を専ら主張せ

しい相互ひに暗殺の難に逢ひ命を全うせるい稀なり因て寅吉い清兵工の身を氣づろひ他のことに比へて数回風諫せしかども聴ぎ然れど其き置きが実東方の激徒の為に命を失ちんと残憂ひ然き役人の手を借り是を獄中に捕へさせおけば攘夷鎖港を主ちるゆ詰るところい皇國を思ふの赤心より出るの奮激なる故切るの突の騒ぎをせぬ内なふ大いなる科めを請るとい無るべし役人の手に捕へさせるい実に危ふき様なれども今日に至り清兵工が身を保護するい是に増き事無らんと思ひ明日長刀へ出立ちるを知らざる故斯い斗らひうりと言ひ或ひい此日清兵工を迎ひに往しい目明の玄藏に寅吉い清兵工が縛に附き で知らぎして有しとも言ふ水文の話しとい大い に反對ちるれども此末寅吉が横田の遺族へ 真実を尽しお宕に對しても淫奔氣などい毫も無

うしとなれば忍らくは此説の方誠なふんう
再説横田清兵工は数年の困苦亜鮮となり守護職の
手より捕へられるや否や清兵工が焚屋町の居宅へは
他の役人をせむるひ家族を残らず引拂はせ家財雑
具はもちろんも及びぜ家蔵とも固く鎖し封印を附
たりしうばさしも繁昌なる書籍の店は忽ち寂漠
なる明家と変じ番頭若者子僧をちじめ召使ひは皆
夫くの宿へ下りお岩は清兵工の母と長子徳太郎二

子庄吉清兵工の妹お樂らと連れ東寺のかさたふよ
清兵工が遊び場又火災の折の立のき所とせし別荘
ありければ清兵工の損様の分るまでとて是を逼塞
して今は下弾さへ下げらればお岩は水汲み米炊ぎ
煮焼の業も手一つにて姑よつと二人の幼稚子を養
ひ昨日は変る憂苦のなりにも頼みとなるは夫の妹
お糸にて互に袖をぬらしあふ涙の露のちかく草菱
れて居ても詮ないるとあきられまじきり励まされつり一

日ひとひと送るうち良人の安否の知れ様ッと待よ
詮なく過ゆきて廿日よ近き日い立どそよ吹く風の
使りだよ歎きよ沈と愁然さる折ゝ次の一間なる
隔紙徐と引あけッお樂い側へ来りて居り〳〵お將工
さん嘸ぞ不自由でお困んなさいませう夫よまア今
日まそい彼様して居つてゆ是ゝ〳〵先の何様なること
やッお兄イさんのゆ様子ゞ訳らない故寔よ案ずら
れまをョ〳〵何様な不自由ゞ仕やう〳〵苦しゝゞ仕や

う〳〵夫よ厭ひ
い無けれど
あんずらめる
い且那の
お身
然いい
へ且
那よ悪い

そのあること言ふでいなく小常のお世話となること
を拓む者ところ恪氣を燒のものとうぶお役人へ讒言し
さので此御災難よあつと訳と察しられ根の無こと
よ違ひないうふ申し口さへ立うへい今よも放免よ
成のぶと世間でも噂をそるそうぶ大方明りが
立て程なくお帰りよ成ませう然が他のよと違ひ真
るよ察ぶられまをよと又も塞いで溜息つけばお樂
い猶も身をよせて「イヽエ彼それいまう見負の人の

取り沙汰で頃日貴嬢と此一所よ出さ時途中で聞さ
咄しの通り桂さんや村田さんも実東方かふ手を入
るので此工地を夜よ紛れ出立よあり長刄へお身
を隠してお仕舞遊だしさとゆふ其様をかふ家長さ
んへの此不審が掛り今度の騒ぎよ成さるけ然かふ
勤王家とゆふと実東との納りの附かげんで猶大事
よあるうも知れぬ其時へ此うへよまず何様る悲し
い目を見様も計られません失故是かふへ神仏の此

利益と願ふより外にあるまいと思ふと実に夜の目も合ひませんヨ〳〵そんなお前のお言ひの通り彩成て居る様子故一寸らしさるよい往まいと察しふれるかふ此程より北野のお社へお願ひ申し塩断をして最二七日の餘よりなれど今に少しの霊験もないまゞ信心の足なのゝ但しい協いね願ひあるを断念ろとのお知ふせうと思ふ〳〵悲し〳〵成て来て愚痴に愚痴が重なり何様したらば宜らうト途方に暮思案も考へも出ませんワ夫だらふ此上い命の限り北野のお宮へ日参して叶いね迄も信心しさら少しいは利益も有うと心を定めて居ますのサ〳〵夫い寔に兄さんの為に有がゝいお心私しも梅と一生断きて天神さま〳〵に願をかけ昼は四辺の人目を憚り夜に成ても宵のくちい慈母さんがお眠

ぬゆゑ夜半より起てい水を灌るのゞ昨日で丁度二廻り障るこの無ぢかう何の便りも冥きのい頂き貴姉のお考への通りに願がけの利きのお知らせうと思ふと支ぐまゝ苦労に成て何様したら宜うに座いませう稱へト言ふも母よい冥せどこの心つくのを忍び音に語りて果い袖ぬらしもお岩お楽の心尽しも其行末の如何なるらん猶續編の巻を重ねて説解べし

春雨文庫七編之上 終

010190509546